

■ 人生の主旨と選択

ある人がガーデンパーティーを開きました。そこに全く関係ない人が来て食事をしていたため、本来招かれた人たちが座れなくなってしまいました。そこでパーティーの主催者は「この中で新郎新婦の知人・友人の方は立ってください」と言います。すると半数くらいの人が立ったところで「今日は誕生日パーティーだから新郎新婦の知人友人の方は多分違うと思います」という知恵深く投げかけ、その人たちは帰っていきました。参加した人たちはパーティーの「主旨」がわかっていなかったため大変な目にあいました。

みなさんはあなたの人生の主旨はわかっていますか？ 私たちはこれがわかっています。そして私たちが主旨を果たした結果、願うものが得られるのですが、これが目的になってしまうことが多いのです。なので、そこで何かをすることがとてつらくなるのです。みなさんの人生はそんな風になっていないでしょうか？ そうなると私たちに「死」というものは「奪うもの」になってしまいます。

多くの人が「生」の延長線上に「死」があると考えますがそうではありません。私たちは生まれた時から「死」を背負っています。だから私たちが「どのよう

に終るのか」ということを考える必要があるのです。今私たちはとても幸せな環境にいます。こんな環境にいる人は本当にわずかです。「自分で決めてなんでもできる、悩みは自分の人間関係だけ」そんな人は世界を見ればほとんどいません。そんな私たちだからこそ「私たちに決める権利がある」ということを知る必要があります。カンボジアにはたくさんさんの難民の人がいます。彼らの環境には何もありません。だけど彼らの多くは笑顔です。彼らは笑うことを選んでいるのです。でも日本人はそれを選ばません。寂しいことです。私たちは選ぶことができます。そしてその一つ一つの小さな決断が私たちの最期を決めるのです。

■ 死とは別つものではない

(Ⅱペテロ 1:5~15)

ペテロは自分の人生がどのように終わるか知っていました。彼はこのあと逆さ十字架刑にかかりました。「命をかけてついていく」と言いながら目の前で「知らない」と言って逃げた「裏切者」です。大変な問題を犯し、自分の人生が終わったという彼に、イエス・キリストは出会い、赦してくれて・・・彼の人生は私たちの人生によく似ています。そんな彼がこの手紙を書いたのです。ペテロはこうして「あなたにもできる」ということを示しているのです。あとは私たちが信じるだけなのです。そして大事なことは自信を失った時なのです。

みなさんは「死」というものをどう捉えているでしょう。多くの人が「別つもの」と思っているかもしれませんが、死は「別つ時」ではありません。そして私たちは必ず「死」を迎え、それがいつかわかりません。だからこそ聖書は、今終わってもよいように「今日を生きよ」と言っているのです。そして、この「死」があるから私たちは「自分に死ぬ」ということを考えられます。ペテロはこのあと裏切った自分がどう生きるべきか、どう死ぬのか、それが描かれたのです。

全ての生命は摂理でそこに置かれ、その役割を果たし終えていきます。ところが私たちが人はそれを知らずに、結局果たさなまま終わらせてしまうのです。だからこそ自分の最期の「告别式」を思い描いてほしいのです。そして「死」は別つものではなく、別つものは「自我」だということを知る必要があります。感情が本当はしたいことをさせていないだけです。「あの人はなあ・・・」「今はなあ・・・」と人が自らで別つ(振り分けて)しまっているだけです。葬儀で、「もっとこうしておけばよかった」と人はよく後悔して言いますが、それは自分を慰めているだけです。

今みなさんの人生は本当に終わってもよいですか？

創生の時代、人は死ぬ存在ではなかったのですが、死ぬようになりました。神様は愚かになった人間に終わりを与え、その終わりに対し、本来の姿に戻るチャンスとしてくれたのが「十字架」です。人が戻るプロセスの一環として「死」を与えたのです。今あなたが「それ」に生きるのは、「ここ」という大切な時のためだということを知っておく必要があります。だから今目の前にある小さな「嫌」なことから逃げてしまうと、逃げてはいけない時に逃げてしまうようになってしまいます。小さなことに忠実に生きることが大切です。「弱いところに向き合う」それがあなたの「死」に関わるのです。あなたの葬儀の時「あなたのおかげで私の人生がある」という人がいますか？ 私たちにはそうしてくれた人がいます。それがイエス様です。イエス様を知った人を通して、私たちはその事を知ったのです。私たちはそれをただで受けました。であるなら、私たちはそれを人に流すべきなのです。だけど私たちは「自分のものだ」と言いたいのです。それを守るためにするべきことから逃げ、人のせいにして逃げてしまうのです。

■ どのように生きて行くか？

「こういうわけですから、あなたがたは、あらゆる努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。」(Ⅱペテロ 1:5~7)

だからペテロはそんな私たちに「徳(潜在的な卓越性)があると言っています、徳は誰でも持っているのですが、それを私たちが知らないだけです。そしてこれは努力で得られるものでもありません。だから「私は素晴らしい」と気づくだけなのです。信仰とは信じようとするだけです。でも私たちが信じるのができません。だけど信じるのができます。「この人を神様はどう創られたか」を知っているからです。

「手遅れ」「仕方ない」という人がたくさんいますが、生きていればまだ間に合います。死を覚悟してやれば1日あればできるのですが、わたしたちにはその覚悟がないだけです。私たちに任された時間があります。そして祈れば回復できるという体験した知識が私たちにあるのですから、自制するために忍耐が必要だと言っています。その忍耐のために敬虔な祈りを持ち、そのためには隣の人を見た時に愛そうとする決断が必要で、そこから最終的には無条件の「愛」に成長していくのです。

「私が地上の幕屋にいる間は、これらのことを思い起こさせることによって、あなたがたを奮い立たせることを、私のなすべきことと思っています。それは、私たちの主イエス・キリストも、私にはつきりお示しになったとおり、私がこの幕屋を脱ぎ捨てるのが間近に迫っているのを知っているからです。」(Ⅱペテロ 1:13~14)

ペテロは自分が去ったあとも、いつでも思い起こさせるために死の間近まで伝え続けました。

「私たちは素晴らしい」ということ、そして「逃げなければ必ず私たちを通して生きた証がたち、あなたが死んだ時、この人のおかげで引き継がれたと言ってもらえる」と言っているのです。

■ 『癒し』とは？

「癒し」という言葉を私たちは使います。ところが広辞苑には「癒す」はあっても「癒し」はありません。には「癒し」という言葉の意味として「①病気やけがが治ること」「②長い間願っていたことがある日叶えられた時のことである」とあります。そしてこれこそ長い間人が探し求めている「存在意義」なのです。

■ 死とは結び合わせるもの

淀川キリスト教病院の柏木先生は死ぬことがわかっている生きる人たちと向き合います。「もうだめなんやろ」そういう患者さんに「もうだめだと思われたんですか？」そこから向き合うのです。人は結局最後は、「なんのために生きているのか」が知りたいのです。そしてここでその人の「生き様」を聞いてあげるのです。だからその1か月でその人の人生がわかるのです。私たちの最後は感謝で終わることができます。自分の命が残されていることがわかるからです。私たちが救われたので誰かのために生きられるからです。教会の葬儀は「赦し」が起こり集まるはずでなかった家族が集まり回復されていきます。「別つ」ためのものではなく「結び合わせるもの」なのです。

■ 最後に…

「自分の命がなくなるということは自分の命を他の人の命の中に残していくことである。自分に与えられた命を、より大きな命の中に溶け込ませるために生きていくことこそ私たちが生きる究極の目的であり、永遠の命につながるのだと思う。」

今みなさんは誰の中に生きていますか？ 対処療法ではできません。あなたがその人の人生に、あなたがされたように命をかけて向き合った時、奇跡が起こるのです。

あなたの人生に脚本があるとすれば、自分の人生はどのようなストーリーでしょうか？ 私達は自分に与えられたアイデンティティに立って生涯を全うすることが、聖書が私達に与えている責任です。私たちに与えられる人生を歩むものになっていきましょう。

(要約者:岩崎祥誉)

(2021年7月18日)